

## 受賞作品

## 塩とインド

市場・商人・イギリス東インド会社

神田さやこ 著

名古屋大学出版会 384 ページ、5800 円（税別）



## 書評

### 商品で見た植民地国家研究

総合地球環境学研究所特任教授 杉原薫

18世紀後半に始まる植民地化は近代インド史最大のテーマの一つである。本書はその本拠地ともいえるベンガルにおいて、イギリス東インド会社が現地商人とどのように切り結び、近代的な植民地国家に変貌を遂げていったのかを、塩という商品を取り上げて論じた優れた実証研究である。

初期の統治においては塩の専売収入が重要な意味を持っていた。専売制度は政府による供給量の統制と競売によって高塩価を維持していた。

しかし、他地域からの塩の輸入や禁制塩の流通の増加によって、この政策は崩壊し、やがてそれを支えていたカルカッタの新興商人層や投機家の弱体化と地方商人の台頭をもたらす。そして、燃料危機などから遂に専売制は終焉を迎え、関税などの新たな財政基盤に移行していくことになる。

こうした一連の過程の叙述から見えてくるのは環境や文化の多様性に規定された市場の動きに対応を迫られ変化する東インド会社の姿である。

本書の示す地域社会の中に市場の変化の主体を見いだす歴史像は、植民地支配という外からの力で変化を説明する既存の立場に修正を迫っている。さらに経営史に踏み込んだ本書の後半部分では帳簿による経営管理の普及など、比較史的な論点も示されている。

インド、イギリス、日本の研究者の主要な関心を踏まえて、関係国に所蔵されている史料を駆使して執筆された本書はアジア経済史研究の水準を大きく引き上げる作品といえよう。